

朝鮮戦争は女性にとって何だったのか？

金貴玉 (キム・グイオク)

1. 戦争は女性にとって何なのか？

21世紀、平和の世紀にも世界のあちこちでは戦争の砲火が止んでいない。すでに解放されてから長いというイラクから米軍による各種犯罪のニュースが時おり伝わってくる。さらに米軍による惨たらしい性暴力事件のニュースが伝えられてくれば怒りで身を震わせることもある。2001年に解放されたというアフガニスタンでは性売買業があふれ出てきつつあるという。

よく戦争は男性のものだという。戦争を起こす政治家も、戦場に引き出され、愛国的な闘争をし、壮烈な死を迎える戦士も男性だという。日本はすべての人的・物的資源を戦争に総動員した太平洋戦争の総力戦体制においても女性を戦士として動員しなかったと自負する。このようなモデルは朝鮮戦争にもそのまま適用され朝鮮戦争で銃を取った人間は男性であった。しかし、果たして朝鮮半島において女性は戦争から安全であり、保護されていたのだろうか？結論から言えば、女性は戦争から安全でも自由でもないまま、戦争の一つの軸を担いきらねばならなかった。

一方、いかなる戦争でも戦争は残酷だが、女性と老人・弱者にとってはいっそう痛ましい。戦時性暴力と戦時犯罪被害者の相当数が女性や老人・弱者たちである。有史以来、戦争とはそういうものだったと皆が言う。だから戦時暴力を当然視する。そのような慣性によってわれわれは、朝鮮戦争において米軍や韓国軍による性暴力に関心さえ持たなかった。ただ女性は戦争の被害者であるだけだと思ってきた。しかし、実際に女性は被害者でありながらも戦争の抵抗者であった。戦争に立ち向かい闘うことこそもっとも具体的な抵抗だが、野蛮な戦争から生き残ることだけでも抵抗であった。

さらに戦争はすべての人と社会に向かって濃い影を投げかける。もちろん米国の現代在来戦で広く使われた枯葉剤によって荒廃した土地は数十年経っても復旧が難しいように、戦争は自然界にも致命的な影響を及ぼす。いずれにせよ一般的に現代社会を変える最も重要な要因として産業化要因を挙げてきたが、戦争は社会的関係や社会的方式を一挙に変えることにおいて革命的要因になってきた。日帝強占期35年にも崩せなかった韓国社会の身分制構造を朝鮮戦争は一挙に崩してしまった。強固だった朝鮮王朝の家父長制イデオロギーの物的土台を内部的に弱化させ、強朝な母像を樹立して遠からず両性平等社会をもたらすことにおいて華々しい役割を果たした。

今度の論文では、朝鮮戦争が韓国社会と女性に及ぼした影響を全般的に指摘してみることにする。

2. 戦争は女超社会を作る

朝鮮戦争は朝鮮半島分断の連続線上にある。分断と戦争を通じて、朝鮮半島の社会状態は広範かつ急激な変化を経ることになった。変化の断面を、人的被害を通じて概観すれば次の通りである。

われわれが推定するに、200万人以上の北韓の民間人と、約50万人の北韓兵士が死んだと思われる。そして約100万人の中国軍が死んだ。約100万人の南韓の民間人が死に、戦闘と関連しては約47000人が死んだ。(Cumings&Holliday、『朝鮮戦争の展開過程』、テアム、1989：202-203)



朝鮮戦争中、市場の女性たち

参考：www.chosun.com/special/gallery/200002/625/index2.html

南北の正規軍人だけでも110万～130万人以上が戦死・戦傷・失踪し、南北の民間人300万人程度が虐殺や空襲・戦闘中に死亡した。1949年の南北の人口は3000万人程度だが、3年間の戦争を通じて南北全体の13%にあたる人が消えうせた。正規軍人や警察官の死亡は、余地なく「戦争未亡人」や戦争孤児を量産した。

さらに南北に渡って広範に発生した離散家族問題は、女性の離散家族化をもたらした。戦時越南者と越北者を含む離散の当事者だけでも約100万人以上であり、その遺家族は数倍に達し、ざっと見積もっても離散家族の合計は約400万人以上であり、朝鮮

半島全体の人口の6分の1に達した。

ところで離散家族をジェンダー的観点から見れば、越南および離散失郷民(displaced persons)の相当数が20-30代の男性であることを発見することになる。さらに1950年代当時の平均初婚年齢が男性24.7歳、女性20.5歳だった事実から推測して、該当する男女すべてが既婚者ではなかったとしても戦死や離散という被害によって連続的な被害者、すなわち多くの未亡人と戦争孤児を生み出したことを予想することができる。実際に1956年に大韓赤十字社が拉北者¹の申告を受け付けたとき、当時、申告された拉北者7,034人のうち、男：女の比は6,884人：150人であり、女性は全体の2.1%に過ぎなかった。

朝鮮戦争過程で南北の社会は、若い20-30代の男性が消え去った「女超社会」へと変貌した。日帝強占期末期の男女比率を見ると、38度線以南地域が女超社会(93.2)だったとすれば、工業地帯や鉾山地帯が多かった以北地域は男超社会(108.3)だった。1953年になれば逆転して、北韓の場合、朝鮮戦争いらい最近まで「女超社会」であり、1953年には女性100人に男性が88.3人にしかなかったし、1956年の男女比率は91.6、1960年には93.8を示す。南韓の場合も1953年の男女比率は97.6、1956年の男女比率は95.4で、女超を示しているが、「ベビーブーム」の時期を経て、1960年代にいたって100.7となり男女比率上のバランスが取れるようになる。

このような女超社会は女性たちに新しい要求をすることになる。過去に経済活動において副次的位置に属する非可視的存在に過ぎなかった女性たちが経済的に前面に出てくるようになる。全般的に農業社会を脱していなかった社会から、女性は市場に、基地村に、お手伝いさんに、工場に進出する。このような女性たちの経済活動は解体直前の家父長制家族を延命させ、韓国社会全体を維持させて、以降の産業化の力を凝縮させることにおいて決定的な役割を果たした。

3. アメリカ文化の広がり与美国式の男女平等「意識」の形成

朝鮮戦争を経ながら女性たちは1970年代の本格的な産業化以前にも、自分自身と家族の生計のために全力を尽くして関与せねばならなかった。もちろんよく知っているとおりの事実上、女性の経済的活動の幅は

1 訳注：北に拉致された人

広がりつつあるが、全く女性の社会的活動を制度的に支えることができなかった。さらに革命的熱気に満ち満ちていた解放空間で男女平等を主唱していた女性の先覚者たちは、朝鮮戦争を前後して「アカ」というレッテルを貼られて歴史の前面から消え去った。女性解放の両性平等運動を主導する主体は潜伏していたか、あるいは消えさせた状態であって、もう一つの要素が男女平等「意識」を形成させていった。まさにアメリカ式、すなわちキリスト教式の自由主義的男女平等意識の登場である。

朝鮮戦争が勃発して以来、韓国社会にはアメリカ文化が根を下ろすようになった。アメリカ式文化の広がりは二種類の文化を定着させる重要な契機になった。戦時に本格化した援助経済が1950年代に定着していきながら韓国経済の対米従属が深化された一方で、韓国人たちによるアメリカ文化に対する自発的な受容が、アメリカに対する憧憬と絶対的貧困の中で成し遂げられつつあった。アメリカのポップソングと映画、クリスマスとキリスト教、アメリカの援助物資および救護物資として入ってきた小麦粉・とうもろこし粉・牛乳を含む食品類、衣類や医薬品、米軍部隊から流出したガソリンと機械部品、米軍部隊の売店であるPX(Post Exchange) 物資とランチョンミート、俗に言うあらゆる「ミジエ(アメリカ製)」の普及と拡散は、韓国国民にアメリカを「恩人の国」として内面化させつつ、アメリカ式生活様式に憧れさせた。

アメリカ文化の他の側面の定着は、キリスト教の急成長と関連がある。朝鮮戦争前には、キリスト教(改新教²と天主教³)は韓国「6大宗教」の一つだったが、1955年ごろになれば改新教は仏教と共に「2大宗教」になり、天主教まで含めれば「3大宗教の鼎立」を成した。

そのような韓国教会の特徴のなかの一つは、女性の宗教だという点である。改新教の信徒全体の62.6%が女性であり、教会女性たちは教会を通じてアメリカ式世界観、自由主義的・反共主義的世界観、キリスト教的男女平等観を自然に内面化させることができた。

1950年代の女性運動家および女性の社会指導者の大多数がキリスト教徒だったのだが、そのうち当代最高の女性指導者である国会議員朴順天(パク・スンチョン)は女性の政治的参加を次のように見ている。

女性が政治を論議すれば天下の大事を論議するように考えているようです。しかし国民の必要を充足させ、国民の権利を増進させるために日常生活を円満に進歩的に営むことであろうと、われわれが毎日使っている飲料水、食料品、居住している住宅を用意することであろうと、子どもを養育する状態、われわれの子どもを教育する方法のようなこと、このようなことが女性としての政治問題であるでしょうから、これは当然に女性もこれに参加せねばならないと信じています。……

男性たちが女性をして自己の使命を知らしめ完遂することができるように、女性の人格を尊重し、家庭の神聖を重視してくれるとさえいえるならば、われわれはわざわざ不便と苦難を甘受しながら政界で涙ぐましい苦勞をしなくてもよいでしょう。そして日々覚醒の度合いが高まる女性たちが、過去のように男性にとって便利な道具のようにになっていたように、今日の女性たちがすべてそのようだと考えるならば、日々進歩していく新しい思想の波動がそのような男性たちを許さないだろうと信じます。全国民の過半数以上を占めるわれわれ女性たちに付与された当然の利益のためであると同時に、特に、次に生まれてくる国民の立派な母になるためには、われわれは敢然とこの不公平な社会と闘い、またすべての不純を除去するために努力せねばならないでしょう。(朴順天、「女性と政治」、《東亜日報》、1953. 5.17)

朴順天によれば、女性が政治を論じ、参政せねばならない理由は、男性が女性の人格を尊重せず、家庭の神聖を重視しないからだという。彼女は、政治に参加することは不便で苦難に満ちて「涙ぐましい苦勞」だ

2 訳注：プロテスタント教会のこと

3 訳注：カトリック教会のこと

と認識して小市民的世界観に立脚して公私の領域を固守しながら家庭的秩序を守らねばならないと考える韓国型「自由主義的フェミニスト」としての面貌を示しているといえる。

他方で、1954年1月から《ソウル新聞》に連載されて空前のヒットを飛ばした小説のひとつである鄭飛石（チョン・ピソク）の『自由夫人』でもアメリカ式の自由の風によって伝統的価値が崩れている社会ムードを反映している。事実、1950年代には「チュムパラム（ダンスの風＝ダンスに夢中になること）」「チマッパラム（スカート風の風＝女性の激しい社会進出を指す言葉）」「ケパラム（契の風＝契という一種の頼母子講に熱中すること）」を通称する「3パラム（3つの風）」という言葉があった。女性の社会進出が広がって家庭での役割が高められながら、一部の女性たちが経済的処分権を持つようになって起こっている現象と関連付けてみることができる。しかし、当時はこれを無分別なアメリカ文化の広がりとも見たりもした。

アメリカ式男女平等意識は、自由民主主義の外装で男女平等「意識」を正当化させる力になった。しかし、このような意識で装うことのできる層は、いわゆる「有閑マダム」によって代弁されて男女平等は能力のある少数の贅沢な意識や行動だと理解された。さらに1960 - 70年、女性労働者たちの凄絶な労働運動のなかでアメリカ的男女平等意識は克服されねばならない対象であったし、真の男女平等をもたらすことにおいて桎梏として作用した。

4. 継続する戦争の影

若い男性層が消え去った分断社会で、女性は国家暴力と性暴力の犠牲者でありながらも同時に「強靱な母」像で包装されて、廃墟になった社会を強靱な生命力で耐え抜かねばならなかった。1950年代が過ぎ、続いて1960、70年代に十代の幼い女性たちは工場へ出て、他方では家族の生計の責任者でありながらも家父長制の守護者として、また一方では産業戦士として働かねばならなかった。社会的に彼女たちの声はいつも低かったが、1980年代民主化運動の過程で、根気強く『反独裁ファッショ打倒！』を叫ぶ勢力に合流した。

振り返れば朝鮮戦争は朝鮮半島に50年以上の冷戦体制を強要した。韓国での朝鮮戦争はアメリカに隷属した国家主導型の賤民資本主義⁴が移植される契機になった。さらに韓国の反共主義は物理的暴力や国家保安法のような超憲法的強制を制度化させたのみならず、支配勢力であれ、民衆であれ、すべての者たちに反共的世界観と自己検閲体制を強要し、内面化させた。1960、70年代の女工の生存権闘争まで反共主義の犠牲になった。

さらに分断国家において家父長文化が資本主義と結合して米軍基地村が拡張されたことは、事実上の公娼形態の性売買業が大手を振って歩く契機になった。1950年代には米軍基地村で稼いだ金が、貿易収支上の輸出で稼いだ金よりも大きかった。そのような軍基地村と性売買業の繁盛は、韓国社会の日陰で性産業と性暴力が非正常的に肥大していく結果をもたらした。

さらに朝鮮半島において、戦争は二重三重の被害を生んでいる。戦争の傷は治癒もしないまま縫合されて人々の無意識の中に内面化されながら、個人的に、あるいは社会的に引っ掻き傷を大きくし、戦争のトラウマを量産している。戦争中の被虐殺者の遺族や離散家族たちは被害者であるにもかかわらず、被害の事実を声に出して語ることもできず、連座制のペールに覆いかぶされねばならなかった。北韓に対する無条件の誹謗と敵対感の裏側にはこのような不幸な記憶が抑圧されたまま身を縮めている。

われわれは戦争と冷戦の悪夢から寢床をはたいて起き上がらねばならない。悪夢から覚めるための最初の一步は、トラウマを記憶することができ、オープンに話しかけるときの可能である。女性の戦争の記憶は、ま

4 訳注：近代以前の資本主義

さに韓国社会と朝鮮半島を自由にするためのスタートラインである。

【永谷ゆき子 訳】